1月（部分）

19 花鳥十二ヶ月図　酒井抱一

十二幅

絹本着色　江戸時代、文政六年（一八二三）
本紙（一～四・九～十二月）各一四一・七×五一・一
（五～八月）各一三九・〇×五〇・四

花鳥図の展開の中で、鎌倉時代の歌人・藤原定家が建保二年（一二一四）二月に、後仁和寺宮（道助法親王）が企画した「月なみの花鳥の歌の絵」の制作に際して詠んだ二十四首の和歌を絵画化した十二ヶ月図は、花と鳥の取り合わせの典型を形成し、美術的な意匠に大きな影響を与えた。すなわち、一月は柳と鶯、二月は桜と雉、三月は藤と雲雀、四月は卯花と時鳥、五月は盧橘に水鳥、六月は常夏と鵜、七月は女郎花と鵲鳥、八月は鹿鳴草と初雁、九月は薄に鶉、十月は残菊と鶴、十一月は枇杷と千鳥、そして十二月は早梅と水鳥である。狩野派や土佐派を中心に、その取り合わせを忠実に描いた作例が多く知られる。それに対して、抱一は、この伝統を基本としながらも、定家和歌には縛られない自由な取り合わせを行い、自身の画風を生かした優美な作品を作り上げた。

酒井抱一（一七六一～一八二九）は、姫路藩主・酒井忠似の弟であるが、書や俳諧をよくし、諸芸に通じた文化人であった。生涯を江戸で過ごすが、絵は狩野派、南蘋派、円山派、浮世絵、そして琳派と幅広く学ぶ。特に尾形光琳の作品に魅了されて、その再興を志した。光琳の画風に傾倒しながらも、抱一の画風は観察に基づいた写実性や叙情性の加味された伸びやかさを示している。

本作品を見ても、各幅には人の眼を引き付ける鮮やかな色彩を用い、しかし全体にはたらし込みや暈しの技法で、優しい色彩の微妙な濃淡を上手く生かして、花や鳥の表情に深みを加えている。草花に造詣が深く、それを主題とした作品を得意とした抱一であるが、その色彩や描法には、彼なりの工夫が重ねられているのである。

12月　檜に啄木鳥図

11月　芦に白鷺図

10月　柿に小禽図

9月　菊に小禽図

8月　秋草に螽斯図

7月　玉蜀黍朝顔に青蛙図

6月　立葵紫陽花に蜻蛉図

5月　燕子花に鷸図

4月　牡丹に蝶図

3月　桜に雉子図

2月　菜花に雲雀図

1月　梅椿に鶯図

6月（部分）

4月（部分）

7月（部分）

11月（部分）

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花鳥―愛でる心、彩る技〈若冲を中心に〉
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 40

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十八年三月二十五日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections